

『説話―救いとしての死』

田中宣一

「終末へのパースペクティヴ」という副題

のついた「まえがき」では、死をめぐる現代的諸問題や終末の光景が盛んに語られ、「改めて、救い主の誕生を願う時代が到来している」といふべきか」と結ばれている。本書の題名『説話―救いとしての死』は、説話・伝承学会の平成四年度の同名のシンポジウムを受けたもので、執筆陣もそのシンポジウムに登壇した人々が中心になっているというが、シンポジウムの企画や本書編集の背景には、「まえがき」に示されているような、現代を一種の終末と認識し、それからの脱却への願いと模索の意図があったものと思われる。確かに右のシンポジウム後に限っても、わが国には、いよいよ終末到来かとの不安をかきたてるような社会的事件や天災があいついで生起した。このような状況のなかで世に問われ

ることになった本書は、すぐれて現代的課題への挑戦の書となっている。

しかしふり返ってみれば、人間の世界は、過去においても、人々の心を不安にさいなま

せた大事件や天変地異に満ちみちていた。その際にも人々は、既成宗教の説く末法思想や終末観の影響を蒙りつつ、今の世は末世であると怖じ恐れ歎きつつけてこなかったであろうか。また、「現代の都市が無数の新宗教を産み出している」ことはまぎれもない事実としても、歴史に問えばそれも繰り返されつつ

けてきたことであって、決して珍しい現象ではない。長い世情不安に陥れば、世直しを求める激しい行動もしばしば起こしたしたが、今こそが末世・終末であるかと諦念し、しかしそういう世からの救済への希求は、何も現代にかぎったことではなかったのである。このことは、本書所載の諸論文がみごとに証明

しているように、いつの世にも、事あるごとに伝承的心意の覚醒がはかられて、常に今日の問題でありつづけてきたといえよう。

そういうわけで、本書の問題意識がきわめて現代的であることは認めつつも、シンポジウムの企画や本書の編集そのものを、右にみたような一連の伝承的心意の顕在化した現象だと捉えることができるのであり、評者には、まさに民俗そのものがここにあるのだと思えてならないのである。

二

本書は論文集で、いろいろな角度から、説話にかかわらせながら「救いとしての死」を考えようとする十一編の論考は、いずれも読みごたえがある。まず、各論考と執筆者を紹介しよう。

再生と蘇生の装置——チベット、カッパド

キアの旅から——……………山折哲雄

死と救済……………井本 英一

尸解の観念の展開……………小南 一郎

死をめぐる説話群——南島を視座として——……………山下 欣一

*

人間の死と救済——佛教説話に於ける

……高橋 伸幸

子育て幽霊譚の原像——曹洞宗葬送儀礼を

てがかりとして——

……堤 邦彦

補陀落渡海の伝承と史実——死と生そして

救い——

……根井 淨

華嚴經破地獄偈をめぐる——王氏蘇生説

話と観心十界図を中心に——

……渡 浩一

*

長屋王伝承考——自死と鎮魂——

……神尾登喜子

救済としての喪失と不在——三島由紀夫の文

学世界をめぐる——

……高橋 文二

浮舟の救い——小野の山里——

……広川 勝美

内容は多岐にわたり、評者の力のおよぼざるもの少なしとしないが、次に各論考の要点を述べ、評者なりに若干の感想を加えてみたい。

山折論文は、今まで訪れたチベットのラサ、インドのパナレス、フランス東南部山岳地帯の修道院などで感じたそれぞれの地の靈魂観には、輪廻転生の考えが秘められている

と分析し、つづいて、トルコとイタリアでの近年の体験へとおよんでいる。トルコではカッパドキア一帯に残る古代の一大地下都市跡、イタリアでは古代ローマの地下墓場というべきカタコンベに身を置き、これらを構築した人々の地下世界への関心の深さに驚き、彼らには地下への下降と天への上昇を等価とする垂直志向がきわめて強かったのではないかと述べる。そこに筆者は、アジアの仏教化圏にはない思考形態を感じている。

井本論文は、法隆寺の玉虫厨子にも捨身飼虎図として描かれている有名な仏教説話・薩埵太子捨身飼虎譚から説き起こし、救済を求めて行なう世界各地のさまざまな死の伝承を論じている。神道学者の説を援用しながら、わが国にも古くからキリスト教や仏教で説くような衆生を救済するための代受苦の思想のあったことを述べ、須佐之男命や倭建命の伝承にそれを見ようとしている。後代の捨身入定の行者の行為も、自らを救いつつ衆生の罪を贖おうという自利他利の境地が開かれた結果であるという。柳田国男が説く一つ目小僧の伝承にも代受苦の思想がひそんでいるとの指摘は興味深い。大赦に人形が用意されたり虫送りの実盛人形も、同じ思想によるもの

であろうか。古代ローマ、インドのヒンドゥー教、古代エジプト等々の代苦者・代死者の事例も挙げられている。地藏や観音をめぐる仏教説話にも言及しているが、苦や死を背負ってくれる存在への希求と畏敬の念が、現世に生きつづける人々に、このような伝承を成立させ保持させてきたのであろう。

小南論文の尸解とは、いったん死を経過することによって、その後最低のレベルで長生を実現しようとする方法だそうで、中国の古代末期から中世初期の神仙思想の中で生まれ、道教信仰に取り入れられ道教信仰の中でさまざまな変化しながらも重要性を増していった、特殊な観念であるという。『抱朴子』や道教の各教典を引用しながら、中国の各時代に現われた尸解の観念を分析し、結局それは、仙界で生きながらえようとする考えから、次第に道教信仰の人々の罪の観念と結合した結果、死ぬことによって罪からの解放（解脱）を願うものに変わっていったのではないかと述べている。論文の内容は中国に限定されているが、わが国の死の観念や説話にも少なからぬ影響をおよぼしているのである。

山下論文は、奄美・沖縄など南島の、死に

まつわる儀礼や墓、他界観を事例に沿って説明したあと、人々の蘇生譚・靈魂譚に言及している。これらは単なる説話として語られているのではなく、事實譚もしくは事實を越える真実の話として人々の民俗生活に溶け込んでいる。そして真実のものと認められる理由を探ろうとする場合、人々が日常的に身を置くシマ（集落）の空間構成の特質と、靈能者として神秘的の世界との交流を持ちつづけるユタの語りの内容を無視することはできないという。

高橋論文は、日本人の死の觀念と積尊の説く死の思想について概述したあと、別に極楽浄土への往生を理想とする仏教思想に触れている。本論文の中心は、後半部分すなわち畜生道に墮ちた亡者の救済を再死の観点から説こうとする部分にあり、それを『日本靈異説』、唐の『冥報記』、『今昔物語集』所載の合計三十三の説話の詳細な分析をとおして行っている。結局説話群の説こうとする点は、苦も多いとはいえ、いま人間界に生きる幸せをひとまず自覚させつつ、仏の教えに心をゆだね、人々に対し仏の慈悲の懷に抱かれるよう求めさせようとするにあるのだという。

提論文の主眼は、各地の子育て幽靈譚が、懷胎死婦人からの胎児分離という陰惨な習俗に代わるものとして、曹洞宗総持寺教団が中世以降布教の手段に取り入れた変死者供養の呪術的儀礼と、密接な関係を持ちつつ形成され、次第に普及定着していったのではないかと説くことにある。諸寺院に残されている近世期の切紙資料（師資相承の一種の布法マニアル）の分析から導き出された結論であるが、好論といえよう。その過程で、通幻伝説など各地の墓中出生の高僧伝や、中国の『離魂記』の内容にも触れられている。

根井論文では、まず、文献に散見する各種の補陀落渡海の伝承を歴史的事実として実証し、その時どきの渡海の意味を明らかにしようとする重要な作業への挑戦がなされている。そのうえで、「中世末期までの補陀落渡海は、観音浄土を現世にみとめ、あえて海を渡っていく現在進行形の精神があらうり、それは同時代の人々の目にはまさに救いとしての死と映っていたが、十六世紀以降の補陀落渡海は、まず入水という形で死が先行し、そういう死の具現化に対して多くの民衆が渡海僧に結縁したのだと述べており、興味深い。ここには先の井本論文が説く代受苦・代受死

の思想がみとめられ、僧にとつては自利他利、民衆にとつては自らの救済を求める切実な心意が存在していたのである。

渡論文の目的は、華嚴經破地獄偈の説話的背景と教理的背景の考察にある。日中あわせて二十三の文献にみえる王氏蘇生説話の詳細な比較検討をもとに、破地獄偈をそうあらしめている王氏蘇生説話が、中国では主に華嚴經靈驗譚として知られていたのに比し、わが国では主として地藏靈驗譚として受容されていたことを明らかにしている。後者の教理的背景については、わが国で流布した各種の観心十界図に記されている四句偈に触れ、その思想と、その一般への受容について言及している。そして、王氏蘇生説話や破地獄偈が流布するにあたっては、熊野比丘尼による熊野観心十界図絵解きが大きな役割を果たしていたことを推測している。同時に、華嚴經破地獄偈の流布には、このほかに、当然のことながら施餓鬼会などの仏教儀礼の影響も大であったと思われるが、その実証は今後の課題として残されているという。

神尾論文は、聖武天皇時代の政治的事變の中心人物長屋王の死への各種の意味づけと、その伝承の成立を、『続日本紀』『日本靈異

記』それに『今昔物語集』の関連記事をとおして考察したもの。『統紀』では天皇の存在に左道を働こうとした者への自死と捉えられているのに対し、『靈異記』では沙弥の頭を牙冊で打ちつけた悪業への因果応報と位置づけられているとし、ここに天皇を中心とした歴史意識と、仏を中心とした歴史意識の相違があるという。さらに、『今昔』を含めて三者三様の長屋王の死への鎮魂と慰撫のありようを解釈し、史書の述べる歴史が、仏教説話など他の文献の説く歴史と交錯するところに、伝承がたち現われるのだとしている。

高橋論文は他とやや傾向を異にし、三島由紀夫について論じられている。三島の文学の背景には、『古今和歌集』の人工的な美にまことの美を認め、そのような観念世界を守ろうとする意思があると述べ、さらにそれは、すでに青春時代に戦争という危機的状況の中で、危機的状況に対抗するようにして形成されていったとする。人工的な観念世界はうなれば虚無であるとともに、不在、喪失、死でもあるといい、不在が想像力によってしか満たされないように、これらは三島の文学創造の起爆剤になったもので、まさに三島文学にとって救済の証であったのだと説こうとし

ているように思われる。

広川論文は、『源氏物語』終末部のヒロイン浮舟の、薫と匂宮双方からの愛に悩んだ末の入水が、幸い一命をとりとめたものの、結果としては小野の里に救済されるための死であったと解釈し、さらに、当時の都びとが捉えていた小野の地の性格にも言及している。

内容紹介は以上であるが、各論考の多岐にわたっていることがおわかりいただけるであろう。今まで評者が意識にのぼらせてこなかった問題も多くとりあげられており、評者の力不足から、論者には不満足な紹介になっているものも少なくないのではないかと心配している。ただ、評者にとってはいずれも刺激的な論考であった。

三

主に説話を素材にして論じられた「救いとしての死」そのものには、二つのパターンがある。一つは、何らかの形で再生を願いつつ自ら受け入れる死である。死はいつかは誰れにもおとされる現実であるが、生ま身の肉

体の消滅にもかかわらず魂は生きつづけ蘇りに期待が持てるとすれば、それは肉体の死であつても死とは意識されない。現実からの救

いということができよう。もう一つは他者の救いを保証するための死で、代受死に属する。他者の救いへ寄与することによって結局は自らも救われることを確信した、意思的な死といえよう。

死がどうしても不可避の現実であつてみれば、人は来たるべき自らの死に何らかの意味を与えておきたい。説話にこめられている「救いとしての死」は、それを語るものかと思われる。再生に願いをつなぐ死であつても他利自利を確信した死であつても、いずれも現実からの脱却とはいえるが、当人にはそこに自らが無に帰してしまう意識はなく、超越的絶対的世界への救いが約束された死であることを疑わない。であるがゆえに、死をめぐるイメージを説話をとおしてさまざまにふくませ語り、受容しつづけてきたのである。多くの人々にとっては、そうした語りの世界に自己を同一化させることがまた、現実における救いの道であつたのかもしれない。

(平成六年四月、翰林書房、B6判 二五四ページ)

(たなか・せんいち／成城大学)